

# わが家の ミカタ

よつも悪くも周囲とのつながりが薄れやすいマンション生活。でも、住民同士がスクラムを組むために、まず必要なのはコミュニケーションです。実は「田舎」との交流を進め、コミュニケーションづくりを生かしているマンションがあるんです。(石村裕輔)

10月初めの奥秩父はそばの花が満開だった。一面に広がる白いじゅうたんの中で年配の男性6人が鎌を振る。汗だくの体に、さわやかな風が吹き抜けた。

ここは埼玉県旧荒川村(現秩父市)。車で約60分離れた同県狭山市のマンション「新狭山ハイイツ」が秩父市から借りている畑だ。約1カ月後の収穫に備え、住民が草刈りに来ていた。

交流のきっかけは23年前。ハイイツに住む地域計画コンサルタントが秩父郡の町村の観光担当者と会う機会があり、「ハイイツがどこかと交流できれば」とつぶやいたところ、旧荒川村が手を上げてくれたという。

以来、住民の農業体験や子ども山村体験などの交流が続く。最近では春と秋に

## 「田舎」が取り持つ 住民の仲

続・スクラムかスクラムか ④

そばを植え、現地の新そば祭りにも住民が参加。ついでにリンゴ園へ寄ってハイイツがオーナーとなっている木からリンゴを収穫したり、温泉に入った。

そばやリンゴはハイイツに持ち帰り、お年寄りたちにも食べてもらう。夏祭りには荒川からそば打ち名人に来てもらい、そばを打ってもらっている。

「団地と自治体の交流は珍しいかもしれないが、市民交流に役立っています」と秩父市荒川総合支所の町田達弥・地域振興課長。山村の側にも、地域活性化のため、市外の人に田舎の良さを知って足を運んでもらいたいとの思いがある。

「何とかなないと。年寄りは大変だ」「どこかが店を出してくれないかな。我々ももっと利用しないと」ハイイツは32棟に約770世帯が暮らす。73年の分譲開始から30年余り。買い物に不便さはあるが、建物は修繕が行き届き、花壇や植栽が目を楽しませる。

6人は草刈りの後、道の駅でシイタケやインゲンを買って帰る。帰りの車内で話題は、団地内のスーパ

住民らは「オートプ」や第2集会所となる丸太小屋も手作りしてきた。

「交流は住民同士の付き合いを深める機会となり、マンション管理をスムーズに進める土壌づくりに役立っています」。荒川交流実行委員会の世話人代表で、管理組合理事の経験もある小菅美さん(76)は話す。交

流は、住民が情報を共有し、いろんな意見を出してもらう機会になるという。

8月の納涼祭にはみなかみ町の物産店も軒を連ね、地元産のヨーグルトや野菜などを買い求めるマンション住民でにぎわった。1年前に同町で開かれた「利根川・江戸川上下流域交流フォーラム」にはニュータウンの住民ら約40人がバスで参加。川を下るラフティングや名所巡りも楽しんだ。

今では千葉県松戸市などでも交流に加わり、11月には「かつば市」と題した交流市が利根川、江戸川流域4カ所で開催される。

分譲から約30年のなぎさニュータウンは7棟約1300世帯。千田さんは「災害に備えて離れた地域とつながりを築くのが交流の狙いですが、住民同士の会話も増えてます。楽しめるところが大事なんです」。



満開のそば畑で草刈りに汗を流す新狭山ハイイツの住民たち=埼玉県秩父市(左)なぎさニュータウンの祭りでは、みなかみ町の物産店も多くの住民でにぎわった=千田節子さん提供

## 農業体験や祭り、マンション管理の土壌作りに



感想は、ファクス03・5440・73354 メール wagaya@asahi.com